

宮坂 宥勝著

「佛教の起源」

雲井 昭善

近年、わが国における原始佛教の研究はいちじるしい発展を遂げ、多くの成果が相次いで世に出るに至ったことは、学界のためまことに喜ばしい限りである。それらの研究成果は、伝統的研究課題とされる原始佛教の教理面での研究はもとより、資料面での原始佛教聖典の体系づけという聖典史研究、そして原始佛教の教団史研究や佛教興起の社会的背景の研究、という言わば文化的な研究にまで多角的に進められてきた。

このような多岐に亘る問題提起とそれへのアプローチは、それぞれに重要な意義と価値をもつものであって、その何れが主で何れが従という如き性質のものではない。そのことは、「原始佛教」もしくは「初期佛教」を学問対象として取扱おうとする場合、その何れもが不可避の課題であるという理由に起因する。いなむしろ、今日の隣接諸科学的立場からすれば、なお多くの研究課題が原始佛教研究に加えられてしかるべきであって、

上述の研究テーマを以て終れりというわけのものではない。何故なら、現存の原始佛教研究資料に徴しても、なお多くの問題提起がなされてしかるべき要因をもちあわせているのだから。しかし卒直に言って、わが国における原始佛教研究は、伝統的に教理面の研究にその多くが費されてきたことは否定しがたい。そのことは、「佛教」を教義的に把握しようとする場合の中心課題であつたことを物語っている。ヨーロッパにおける原始佛教研究は、まさにそれに答えたものであり、わが国における先人・学人の諸業績も、その延長線上に展開されたものであつた。それは、十九世紀におけるヨーロッパ佛教の伝統——バリー聖典の研究——に負うものであつた。

こうした研究方法に対して、近年、原始佛教、初期佛教を広く社会文化的な観点から捉えようとする動きが、大きくクローズ・アップされてきた。もとよりこのような問題提起は、夙に早くT・W・リス・デヴィッツ(Buddhist India)やR・フィック(Die soziale Gliederung im nordöstlichen Indien zu Buddha's Zeit)の著書にとりあげられ、わが国でもその方面の論及がようやく原始佛教の研究史を飾るに至つたが、未だ体系的な研究がなされなかつた。しかるに近年、中村元博士によつてこの方面に関する輝かしい成果——特に『インド古代史』上、(中村元選集5 昭和三八、春秋社)『宗教と社会倫理』(昭和三四、岩波書店)——が次々とあらわれ、原始佛教研究は新しい段階を迎えたのである。

こうした状況の中で、佛教興起の時代に関する文化的研究

に大きな波紋を投げたのが、D・D・コーサンビーの著『インド史研究序説』(An Introduction to the Study of Indian History, Bombay, 1954) ※よその改訂版『古代インドの文化と文明』(The Culture and Civilisation of Ancient India in Historical Outline, London, 1965. 山崎利男訳)インド古代史』昭和四一、岩波書店)であった。この書の基調となるフールド・ワークよりする論及は、原始佛教研究史に新しい視点を提供した。その論旨は多くの示唆に富み、佛教興起のインドの社会的背景をより客観的に、極めてヴィヴィッドに浮彫にした。一方、W・ルーン(Geschichte der Indischen Philosophie, Berlin, 1954)やD・チャートバーディーヤ(Lokajata, A Study in Ancient Indian Materialism, New Delhi, 1959)によって代表される国家と種族、唯物史観に立つ論及は、われわれに新たな関心を喚起せしめずにはおかなかった。かくして、「原始佛教」というよりは「初期佛教」の研究にとって、あまりにも新鮮味の溢れた多くの問題が提起された。こうした状況の中で、今回、宮坂有勝博士の『佛教の起源』という大著が出版されたことは、学界の進展に裨益するところまことに大なるものがある。著者がかつて「種族社会と佛教の起源」(『密教文化』第五六、六一―六三卷)の論文において、「佛教成立の根源的基盤は種族社会にある」と論及した。その際、「ゴータマの舍利八分のとき、クシナガラに集まったのはアリアン化されつつあった種族たちで、これら種族社会こそ佛教の眞の母胎であり、非アリアンの、反バラモンのな氏族宗教

こそ佛教の萌芽の基盤であった」(前掲誌第五七号、七一―八頁)として、示唆に富んだ論文を発表している。今回の著書『佛教の起源』は、まさに著者積年のテーマだったへ佛教が種族社会に起源をもつ、という論旨を基調として、佛教の種族的起源の解明に種々の角度から肉迫したものである、と言えよう。

二

本書を貫くものは種族社会を解明することであり、それを解明することによって「佛教の起源」を種族社会に求めようとした。著者がそのあとがき(四八―頁)で、従来、「わが国の学界ではほとんど取挙げることのなかった佛教の種族的起源の問題に着目」したと述べているように、その意味では問題提起とその論及は画期的と言ってよい。序説「佛教興起時代の種族社会」にはじまって、第一章「種族社会の遺制」第二章「残存種族」第三章「種族社会と佛教の起源」へとつづく前半の構成は、まさに本書の骨子をなすものであり、後半の第四章「古代インド文化と初期佛教の成立」第五章「初期佛教と密教の発祥」及び第六章「初期佛教の文化史的考察」へとつづく叙述は、初期佛教を文化史的に考察しようとしたユニークな論考である。そのことは、初期の佛典にみられる「種族的起源をもつ、民間信仰あるいはバラモン教的な起源をもつ信仰や神話的要素」を、古代インド文化という広い視点から分析し、以て初期佛教の文化史的背景をさぐるうとしたことを意味している。

このような著者の問題提起は、従来、インド文化史解明に大

きな比重を占めていたアリアン文化に対して、非アリアン文化の占める役割とその重要性を再認識し、そのことが種族文化に大きく関わりあっていることの意義を世に問うた点にある。それ故にこそ、著者は、「近代的な意味での合理主義、知性主義を初期佛教に求めるのは一概に誤っているとはいえない」としながらも、「比較宗教学の長足の進歩の結果、神話や伝説、その他虚構と思われる諸形態においてこそ、かえって歴史の真実、歴史の情感が表現されている」とし、「それらがいかなる歴史的事実に裏づけられているかを改めて問う必要がある」（はしがき一三頁）と力説する。こうした思考は、既にD・D・コーサンビーによってなされたフィールド・ワークによる業績の中にも窺われるように、その問題解明は、従来の文献学的な操作のみでは十分に果遂されない。著者がインド各地の实地踏査によってその論旨を肉づけたことは、読者に対する説得力を倍増したものと言えよう。特に、原始佛教を知性主義的、合理主義的に扱おうとする場合に、ややもすれば排除しがちな神話、伝説、思想の夾雑物を改めて問い直そうとした主旨は、多くの成果をもって本書を実り豊かなものとした。その意味でも、本書の問題提起とその解明は、われわれに多大の関心を喚起させる。以下、全六章の中から、その中心課題と著者の解明を辿ってみよう。

三

先ず序説において、釈迦族が存在していた前五、六世紀ころ

をインド古代社会の変動期とし、当時種族社会は原始共同社会の最高の組織形態であったが、やがて共和制国家の基礎をなす過程で解体しつつあったと把握する。この「種族社会の崩壊という社会的変革こそ、古代佛教の教理の形成と原始佛教教団の出現の土台である」から、「佛教成立の客観的具体的な条件を分析するための鍵である」と理解している。このような種族社会と佛教との関係という設問に関して、この序章において海外における業績を手際よく整理する。即ち、先述のR・フィック、T・W・リス・デヴィッツ、B・V・パヴァン (*The History and Culture of the Indian People*)、S・A・ダーンゲ (*India, from primitive Communism to slavery*)、W・ルーベンやD・D・コーサンビー (特に食物哲学とトーテムイズム)、チャットーパディヤヤー (特に「ガナパティ」と「サンガとニャティ」) 等々。その中で、著者は、古代佛教の社会的経済的基盤を商業の発達、都市の出現に求める立場に対して、「種族社会こそ佛教発生の真の母胎である」と明言し、「非アリアンの、ないし反バラモンの種族宗教こそ、佛教の萌芽の基礎である」とする立場を闡明する。

第一章では種族制 (第一節) 種族宗教 (第二節) の二節を設け、第一節では種族社会ないし氏族制の社会に関する問題を提起し、この設問から前五、六世紀の北インド地方における諸国家の形態を、従来「王国」「大国」と呼称したことに対して奴隸制国家であると概念規定をする。又、「都市国家」に該当する語 Janapada は、種族制の痕跡を残している一種の民属集団

であつて、独立した一箇の国家に移行してゆく過渡的形態であることを解明する。そして、佛陀時代における政治的国家群 mahajanapada の出現は、種族制的共和制を破壊に導き、種族制度は地縁的には村落共同体に、階級的にはインド固有のカーースト制度に転落していったと把える。そのために、種族社会 (Sana) 、血縁体としての氏族 (Kula) 、氏族の系譜 (Kula-vamsa) 、ゴートラ、ジャーティなどの重要術語を検討し、この概念規定をサーキヤ族にあてはめて叙述する。かくて、一切衆生をすべて「佛子」とみる大乘佛教の在り方は、佛陀と同族同類の者、血縁体における血の紐帯が法の紐帯、法縁の意識に転化したと理解しているのは、文化史的な把え方として注目したい。第二節では、佛教は、氏族または種族に固有な宗教としての永い歴史を有することを、過去七佛、過去十五佛、過去二十四佛の伝承の中で把える。また、佛陀を、種族社会にあつて生産力を意味する夜叉、またはナーガ (Naga) と称する経典の歴史性、あるいは竜王灌水、即行七歩の儀式も氏族制社会における宗教儀礼とみる。そして、原始佛教聖典にみられる食物儀礼、食物に関するタブーは種族宗教の名残りであり、トーテムズムに起源するとして、原始佛教に残るトーテム氏族の問題を扱っている。

第二章は原始佛教と残存種族 (第一節) 舍利八分の種族的意義 (第二節) より成る。先ず第一節では、佛陀時代の諸種族、即ちマツラ、リッチャヴィ、ヴィデーハ、バツガ、ブリ、コリーヤ、モリーヤ、ブラーフマナ、カラーマなどの各種族を広汎な資料を駆使して浮彫にし、そこから佛陀時代の歴史的社会的な特徴を、種族社会と新興国家との共存する不均等社会、種族共同体より奴隷制的国家への移行という形で把握する。

第二節は、舍利八分を伝える梵・巴・漢の諸資料にみられる種族名を整理し、クシナラに使者を遣わして佛舍利を受けたのは、サーキヤ族と血縁関係にあつた種族民であつたこと、特に舍利分配に生じた紛争の調停者がサーキヤ族の血縁種族だつたコリーヤ族のドーナであつたことを注目する。

さて本書の骨子となる第三章は、種族法の佛教的受容 (第一節) 佛教と種族的思惟 (第二節) より成り、前者にあつてはヴァツジ七不退法の条項を詳細に検討し、後者にあつては縁起説とウパニシャッドの食物哲学を問題にする中で、縁起系列中の四食説をとりあげて著者の問題提起とその解明を試みている。

先ず第一節では、釈尊が称讃したヴァツジ族の七不退法の原型としてヴァツジ種族法 (Vajj-dhamma) を推定し、佛典中の七不退法所伝の資料を整理しつつ種族の法と佛教僧伽の法との対比を試みる。そこから著者は、種族法としての七不退法は、(一)血縁集団の集会 (二)血縁集団の結合 (三)種族法 (族制) の遵守 (四)婦女子の貞潔または婦女子の尊重 (五)長老の尊敬 (六)祖廟の尊信 (七)阿羅漢の保護に関する不文律を内容としていたことを指摘する。かくて、バラモン法典とは異質的な律典の特色こそ、佛教の思想的基盤が種族社会にあつたことに由来すると叙述する。第二節では、D・D・コーサンビーの食物哲学 (Food-philosophy) に注目し、縁起説の系列中にみえる四食説の問題を検討する。特に、論理的認識論的關係において縁起系

列を把えがちな縁起の解釈に疑念をささみ、何故に「四食説が原始佛教の根本教説―縁起説―に入ってきたか、その起源、意味を問うている。これについて、著者は古ウパニシャッドの中に食の語の発生契機を模索し、佛教の食説と比較対照するという方法をとる。その結果 *anna* と *āhāra* の二語について比較検討する中で、縁起系列中に食 (*āhāra*) を数えるのは、佛教の独創というよりも古ウパニシャッドにおける食 (*anna*) による輪廻の発想法に近似点を見出そうとしている。しかもこの食による輪廻的な発想法は、食物トータムという古代的思维の残滓と見做しうると理解する。したがって、食を起点とする逆観縁起にこそ古い原初的な縁起形態を認めるべきである、と大胆な意見を開陳している。

さて文化史的な観点から扱った後半の三章において、特に重要な問題提起を集約すると次の如くである。

(一)ウパニシャッドと原始佛教聖典「相應部経典」との間ににおける思想の類似性について注意する。特にアートマンの光を究極的な人間の光とみるウパニシャッドの解釈に対し、相應部では正覚者の光こそ最勝の火であり無上の光であるとする点について、両者の荷負の関係をさぐり、その共通基盤としての火祭祀に關説する。そして、原始佛教聖典に認められる拜火儀礼に対する思想的反省は、都市において祭火を絶対神聖視するバラモンの家父長制社会が崩壊しつつあった時代の動きの中にあるとされたもの(二二七頁)と理解している。

(二) 積尊をマールヤーヴィン (*Maryavin*) とする解釈については、

マールヤーを知る者はアスラであったからアスラ思想系譜の痕跡をとどめているとする。(以上第四章)

(三) 明 (*vidya, vidya*) は光明で無明 (闇愚) と対比されるが、無明はまた悪魔に喩えられるから、死魔を超克した不死 || 涅槃 || 甘露の門を開いた正覚者は、悪魔の征服者である。このような無明と明とにみられる比喩表現は、佛教固有でなくて佛教興起以前からバラモン達に周知のものであった。明によって不死を得ることは、ブッダの降魔神話と不可分の関係をもつと叙述する。なお、密教において *vidya* を「明」に「呪」を加えて漢訳されることへの問いかけを、原始宗教における生と死の問題が死魔と闘争という呪的なかたちで示され、死 || 闇黒 || 悪魔という觀念連合が形成される中で、祭式的な要素と知性主義との弁証法的關係の中で位置づけられる、とする。

(四) 過去七佛の信仰形成の基盤には、インド・アリアン文化と非アリアン文化とが綜合されたものであるとし、それは、佛教がサーキヤ族中の、とくにゴータマ氏族に伝えられてきた土着の氏族宗教を革新したものであるとする証拠となる。(以上第五章)

最後に「非アリアン文化と佛教」の第六章では、初期佛伝に断片的にみられるナーガ神話に關し、インド古代史の一断面に照明を与えている。そこから、①佛教におけるナーガ信仰に先立って種族社会におけるナーガ信仰があったこと。農耕種族民の間の信仰では、水とナーガ、樹木とナーガの組み合わせがみられること。②種族解体と同時に神格をもったナーガは没落する。

◎封建的な土地支配体制の確立後も、農村村落ではナーガは水の支配者、雨降らす者として信仰されること。かくて、佛伝にみえるナーガは架空の神話的存在でなく、実は古代インドにおける農耕種族共同体の生活が投影されたものである、と結ぶ。

四

以上の如き構成をもつ本書は、付説として本書に扱う重要な術語・概念——十六大國、民属集團、サーキヤ族、トーテム現象等々——について註記的に解説し、読者の理解に資している。卷末に索引と古代インドの歴史・文化に関する広汎な参考文献一覽とインド古代佛敎史地圖を挿入し、この問題にアプローチする研究者に供している。

本文四七六頁に亘る本書に盛られた問題提起とその理解は、その一つ一つが重要な課題であるだけに、評者にとつて限られた紙幅ではその一つすら十分に検討しうるものではない。ここでは、本書の重要な問題提起とその理解を羅列したに過ぎないが、何よりも先ず、種族社会というわが国では未開拓の分野に斧鉞をうちこみ、開花させた著者に甚深の敬意を表したい。ただ、著者の基本的課題に関連して、一、二の問題を提起してこの紹介を終りたい。

(一) 佛敎の起源を種族社会に求め、そのための科学的操作は本書によって明解にされたが、「種族社会はすべて解体すべき運命にあった。佛敎は人間の真の自由、平等・慈悲が息吹いていた種族社会の宗教的再建をめざし」(二〇頁)「種族解体によってその後、再びそ

のような社会(種族社会)のやつてこなかった政治的國家のなかに根を下した」(八頁)とする論旨は、◎種族社会に起源をもつ佛敎と、◎種族・民族を超えたところに起源をもつ佛敎を考えられるのであろうか。

(二) 共和政体(Republic)と種族社会(Race)との概念規定(一九頁)。

(三) 社会的經濟的基盤よりも種族宗教に佛敎の起源を求めると立場は、生きた宗教教団としての佛敎に對してどう理解すべきであらうか。

(四) 四食説の縁起系列に占める位置づけは十分理解できるとしても、縁起説の胎生學的考察と論理的考察という二つの縁起観が、宗教としての佛敎にどういう役割をもっているかを、十分に考慮されるべきであると考え。

(四) 積尊入滅前、種族民の住む土地へ足を運んだことは、積尊が種族出身であったことと無縁でないのみかそこに佛敎の起源を探る上に多くの暗示がある(四八〇頁)とする叙述は、示唆に富んでいる。

ただ、佛敎が種族を超えて宗教としてインドに根を下した、言わば種族・民族を超えたところに宗教的再建の場をもつたとする論旨と対応して、佛敎の始源という場合の「佛敎」をどう位置づけるか。

(一)の設問と関連して)

以上、若干の問題点を述べたが、本書の出版は——著者が「佛敎の起源序説にすぎない」と言われるが——初期佛敎の研究に新しい視点を提供したものであり、その成果は高く評価されるものであることを疑わない。なお、文中の傍点はすべて筆者のものである。(一九七二・十・三)

(A5版、本文四八五頁、附地図一、写真一四葉、索引・資料八五頁、序文九頁・東京(山喜房佛書林)昭和四六(一九七二)年 定価七、五〇〇円。)